

エレミヤに於ける預言者の性格

小 田 丙 午 郎

要旨 エレミヤの旧約預言史上に於ける意義はその生涯とその性格にあると云われる。本文はエレミヤの預言者としての性格の一端を預言史上から管見したもの。

一

「主の言葉がわたくしに臨んで言う、
わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに
あなたを知り
あなたがまだ生れないさきに
あなたを聖別し
あなたを立てて万国の預言者とした」。

エレミヤ書一、四―五

エレミヤが預言者として召命されたのは南王国のヨシヤ王の治世十三年（紀元前六二六年）の時であるとエレミヤ書の記者は伝えている。

召命は預言者の必須の課程である。エレミヤ記の記者がこの意味に於

エレミヤに於ける預言者の性格

て上掲のヤハウエの言葉註一を同書の巻頭に歌わせたのは記者の常道であった。ヤハウエのエレミヤに与えた使命は預言者、その預言史上に於ける地位は世界的。そうしてこれはヤハウエの永遠の予定計画、エレミヤは預言者として生き預言者として死んだ。併し彼自らは著書も語録も残さなかつた。彼の語録註二を綴り彼の預言生活を纏めて一書にしたのは彼の書記バルクであった。

人に於ける課題は神に於ては所与である。
人の終末は神の端緒である。かかる見地に立つものは預言文学である。

バルクも亦かかる見地からエレミヤ書に彼の信仰を反映させている。

註一、旧訳聖書はエホバの名称を用いて併しこれはヤハウエの誤。

註二、エレミヤ書三六、四―三一。

二

預言者はヘブル語で נָבִיא (Nabi) と呼ばれる。

この意味は言語学上不明とされている。

若しこれがアツシリヤ語 Nabu またアラビヤ語の Naba'a が関連があるとするれば、ナービーは語る者でなければならぬ。

ナービーに關し邦語の予言が当てられる向もないではない。予言と云えば未來に關する先言である。ナービーにこの先言者に近い意味があつた事はサムエル前書に

昔イスラエルでは神に問うために行く時にはこう言った、「さあ、われわれは先見者のところへ行こう。」今の預言者は昔は先見者といわれていたのである。九、九

と記されている所から明である。

ここに先見者と訳されている原語は *רוֹאֵי רוּחַ* Rohe (ローエ) である。サムエル書が編纂されたのは王政末期即ち紀元前六百年頃と推定され、その原動力となつたものは所謂^{註一}甲命記者たちであつた。

因に甲命記者は律法から預言への過渡期的存在であつた。

このサムエル書編纂の時にはローエは既に過去の段階に屬しナービーの歴史的 성격は変貌してはなかつたか。

ナービーは語るものであつた。嚴密に云えばナービーはヤハウエの言葉を語るものであつた。ナービーはこの故にヤハウエの代弁者であつた。ナービーが時代に対しカリスマ的支配を勝得たのは正にこの一事の故であつた。

預言者の語るものは神の言葉であつた。

では神の言葉は如何に語られたであろうか。イスラエルに於ては語るものはヤハウエでありこれに聞くものはイスラエル民族である。ヤハウ

エは云わばイスラエル民族の神である。ヤハウエが語る対象は集團であつて個人ではない。しかしヤハウエが語る言葉は直ちにイスラエルに伝えられなかつた。ヤハウエの言葉がイスラエル民族に伝えられるためには両者の間に媒介を必要とした。そうしてその媒介の任務を果したのは祭司であつた。祭司はナービーの前身であつた。

本文に於て預言者が祭司の中からかまたこれに反して起つたか——などに就て、言いかえれば祭司と預言者の社会的考察は意図されない。併し預言者は何故に祭司から分離したか。この間は不問に附されてはならない。

このために問われなければならないのは祭司がヤハウエの言葉を聞きしこれをイスラエルに伝達する様式である。祭司はヤハウエの言葉をきいた。それはイスラエルの民族的危機に際してであつた。併し民族的危機が一度去つた暁はヤハウエの言葉は儀文化された。それは語られた言葉ではなくむしろ伝承として特定の人によつて公式的にイスラエル民族に伝達された。ヤハウエはイスラエルの神であつた。そうしてイスラエルはその民であつた。一方ヤハウエとイスラエルとは契約によつて汝と我との呼応的人格關係に立つていた。而もヤハウエとイスラエルのかかる汝と我との呼応的人格關係は歴史的に規定されていた。ヤハウエは歴史の神であつた。この限に於てヤハウエは歴史を通しイスラエルに語りかけなければならなかつた。しかし祭司に於てヤハウエとイスラエルの呼応的人格關係は杜絶された。

祭司に於てヤハウエはその過去性に於て記憶されその現在性に於て直覺されなかつたし、またこの未來性に於て待望されもしなかつた。民族

的危機に訪れた時、古代社会はその打開を神託に依存した。これはイスラエルに於ても例外ではなかった。

イスラエルの民族的危機はイスラエルの歴史的覚醒を促した。彼等はヤハウエとイスラエルとの契約関係を歴史的に溯源した。

彼等はヤハウエを過去性に於て記憶する事からそれを現在性に於て直覚し、そうしてこの未来性に於て待望した。

ヤハウエとイスラエルの呼応的人格関係は再びここに取戻された。

ヤハウエはイスラエルに語った。この時は祭司は既に新しい葡萄酒を盛る古い皮袋であった。彼等の時代の使命は既に終わった。新しい葡萄酒を容れる新しい皮袋の担手は預言者であった。併しこの事は多くの人が主張するように預言者と祭司との対立を示唆するものであろうか。祭司も預言者も集団的存在であった。それは対立する階級であった。併しこの二つの階級には精神的交錯が絶無であつたらうか。

エレミヤはアナトテの祭司のひとりとして記されている。エレミヤは祭司であつた。エレミヤは預言者としてヤハウエに召された。ここにエレミヤの公生涯が始つた。併しエレミヤの公生涯を裏づけるとして人は彼に対する預言者の感化を予想するのは不当であらうか。

人はホセヤ^{註三}のエレミヤに対する影響を例外なしに重視する。この事はエレミヤとホセヤに指導された預言者たちとの精神的交渉を意味するのではあるまいか。

預言者を預言者としたものはヤハウエとの人格的呼応による内人性にあつた。併し彼は他面その資格を外人性に於て実証された。

預言者は先に述べたように集団的存在であつた。また彼にその集団的

共通的性格として特色づけられるものはエクスタイズム^{註四}であつた。厳密に云えば集団的エクスタイズム (Group-ecstasy) である。

エクスタイズムの本質は何であつたらうか。これを明確に規定することは恐らく不可能に近いのではあるまいか。

若しエクスタイズスが潜在意識の下に胎動する生命の現象であるとすれば、預言者のエクスタイズムもまたこれに近似するものがあつたと云えよう。

彼等はヤハウエの言葉を語った。しかし語る彼等はこれを自らの所為と感じなかつた。

ししがほえる。

たれが恐れないでいられよう。

主なる神が語られる、

だれが預言しないでいられよう。

彼等の行動は時として常道を逸していた。

アモツの子イザヤが裸体で歩行した。^{註五}

これはヤハウエの言葉が象徴に於て伝達されたものであつたらう。

一口に云えば預言者の外人性は異常的であり熱狂的でありそうして象徴的であつた。

この故に預言者は超人的存在であつた。

この超人的性格の故に預言者は時代の畏敬の対象とされた。

預言者の本質はしかしその外人性^{註六}にはない。それはヤハウエの言葉の

代弁者たる内人性であった。

人はヤハウエの言葉と云う。

ではヤハウエの言葉とは何であらうか。

屢々云われたようにヤハウエとイスラエルとは汝と我との關係に於て人格的に呼応して、否呼応すべきであつた。この事はヤハウエが語りイスラエルがこれに聞くこととなければならぬ。別言すればヤハウエとイスラエルとの間に開いそうして応えられる對話關係が与件されていなければならなかつた。

ヤハウエの言葉はこれ故に一方に於てはその至上命令であり他面にイスラエルの間に対する応てなければならぬ。

ヤハウエの言葉はイスラエルの民族的危機に於ける神の側からの非常警告であり他面また選民側からの間に対するヤハウエの解答でもあつた。

預言者を特色づける外人性はエクスタイズムにあつた。ここにヤハウエとイスラエルの汝と我との呼応的人格關係は存在したのであろうか。ここに於てはヤハウエとイスラエルの間の關係は話すものと聞くものとの一方的交渉が支配しているのではなからうか。

エリヤは預言者であつた。彼にも亦エクスタイズムの外人性があつた。

彼はカルメル山上でバールの預言者四百五十人と対決し敵人を顔色なからしめた異能を行った。これに於て彼は時代の英雄となつた。

併しこの異能は彼に本有なものではなかつた。この異能はヤハウエの言葉に裏づけられる限界に立たせられていた。

彼はヤハウエの言葉の裏づけを失つた。

往日の勇者は今ほ懦夫として王妃イゼベルの一喝に逃亡を餘儀なくされた。

註七
エリヤはホレブ山上で再びヤハウエと出会つた。

主は言われた、「出て山の上で主の前に立ちなさい。」その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかつた。

風の後に地震があつたが地震の中にも主はおられなかつた。地震の後に火があつたが火の中にも主がおられなかつた。火の後に静かな細い声が聞えた。列王紀上、一九、一一—一二

ここに人はヤハウエとエリヤの再会に於けるエリヤの変化を見るのではなからうか。

ここに立つものは預言者エリヤではない。

エクスタイズムの喪失者としての名もないエリヤである。

エリヤは預言者の集團的資格を奪われた。

ここにはヤハウエと個人エリヤの對話が始らうとしている。ヤハウエとエリヤとの汝と我との出会いはここに実現したのではあるまいか。

エクスタイズムの中に語られるヤハウエの言葉は嚴密な意味で汝と我との人格的出会に於て止揚されたものであろう。

パウロが預言はすたれ異言はやみ知識はすたれるであろう (コリント人への第一の手紙一三、八) と云つた時、ここに挙げられた預言とはエクスタイズムに於けるものを意味しなかつたであらうか。

エクスタイズムを外人性とした預言は一時的であつた。

人は漠然と預言者と云う。併し預言者が狭義にそうして歴史的概念に於て規定される時、古典預言者 *Klassische Prophetie* と記録預言者 *Schriftpropheten, Writing prophets* とに二分される。

エリヤは古典的預言者に属し、アモスは記録預言者の最初の人と云われる。

古典預言者と記録預言者とは歴史的に規定される。即ち前八世紀イスラエルの南北両朝の分裂時代を境に両者が区別されるのに異論は呈されないであらう。

古典的預言者と記録預言者はしかし類型的区別をも可能とされるのではなからうか。

預言者に於けるエクスタイズムが古典預言者を以て終つたと論断するのは云過であらう。しかし預言者の外人性としてのエクスタイズムは記録預言者に於てその重要性を失つたのではあるまいか。

記録預言者に於る外人性は内人性に支配されたと推定するのは失当であらうか。

口から筆、集団から個人へ、——この推移課程に於て人は古典預言者から記録預言者への発展を跡付けようとする。

この試は何を意味するであらうか。

預言者が集団的存在である限り、ヤハウエの言葉は語られる対象を個人とすることが出来ない。この事は他面ヤハウエの言葉に於ける語る側の一方性が支配しているを承認しなければならぬ。この場合ヤハウエの言葉を権威づけるものは個人の主体的良心よりもむしろ集団の社会的心理ではなかつたか。

ヤハウエの言葉の権威の究極の根源はどこにあるか。ヤハウエの言葉は至上命令でなければならぬ、併し他面神とその選民の汝と我との人格的呼応による問と答との綜合でなければならぬ。これはヤハウエの言葉が語る預言者の良心と自己同一を見なければならぬ事を意味するものと云つて差支がないであらう。集団には政治的自由があつても良心的自由がない。良心的自由は個人にのみ存する。

その権威を集団に依存する時、時代への挑戦は勝利が予想される。反之その権威が個人の良心に基礎を置かれる時、人は時代への挑戦に於て敗北を前提としなければならぬ。

時代に於ける敗北が予想される時、人は永遠に於ける勝利を期待する。集団に表現されたエクスタイズムには強いパトスがもられている。

併しこれには正しいロゴスが欠けた不足している。個人の良心の承認によるヤハウエの言葉は強いパトスと共に正しいロゴスが反映されなければならない。

古典預言者から記録預言者への発展史には以上の様な内的関連が存するのではなからうか。

註一、甲命記者はD記者と呼ばれる、Dは(Deuteronomg)のイニシャル。

註二、出エジプト記第十九章。

註三、北王国ヤラバヤム二世(前七八三—七四三)の記録預言者、アモスと同時代に預言した。

註四、関根正雄イスラエル宗教文化史一〇一頁。

註五、イザヤ書二〇章一—三。

註六、外人と内人の用語はコリント人への第二の手紙四章一六から引用。

註七、北王国アハブ王(前八七五—八五四)の預言者引用の列王紀上、一九、一—一二はエリヤ物語で史実ではない。これが作られたのは彼の死後で

大体前八世紀とされている。

三

既に触れたように預言者をして預言者たらしめたものはヤハウエによる召命であった。

エレミヤも亦ヤハウエの召命を蒙った。

エレミヤ書の記者の筆によればエレミヤの召命はヤハウエとの親近観を示している。

イザヤが召命されたのは南ユダのウジヤ王の死の時(前七四〇年)であった。その詳細は同書六章に莊重な文体を以て描かれている。イザヤの召命には天使が下つて、全地は異様な光景を呈した。ここにヤハウエとイザヤの被造物感註一が示唆されている。序にイザヤに啓示されたヤハウエはイスラエルの聖者と呼ばれている。聖なるものこそイザヤ書の神觀を道破した言葉である。

ヤハウエとエレミヤの出会いには天使も下らない。その出会いの場所はあめんどろが植えられ厨房に近い平凡な背景であった。

これはヤハウエの自己啓示の時代的展開を示すものと推測されて誤らないであろう。

ヤハウエはエレミヤに於いてイザヤより更に近くなった。イザヤには古典預言者のエクスタイズムの残存が未だ精算されていない事は既に指摘した。イザヤはヤハウエの言葉の代弁者として南方ユダの危機を克服した。

彼は一世の超人としてカリスマ的支配を行った。しかしエレミヤには

古典預言者に於けるエクスタイズムの残存が見出されるのは困難でありまたその超人性に遭遇することは絶無と云つても過言でない。

エレミヤは超人ではなかった。彼は凡人であった。

エレミヤも民族的危機を直覚した。

彼に於てこの民族的危機感註二は潜在意識の中に彼を恐怖させ戦慄させていた。

ヤハウエは彼に近くなった。彼もヤハウエに近づいた。エレミヤをしてヤハウエに親近させたものはかかる潜在意識に於ける民族的危機に対する圧迫感ではなかったか。

危機と危機の事象とは同一ではない。

人は危機の事象を分解する。併し危機の実体は解釈の世界を超えていく。

イザヤは危機の事象を分解しこれを解釈する預言的使命とその技能とを具備していた。併しエレミヤに於ては危機の事象の分析解明よりも危機の実体の直覚とその克服に關心が集中した。

エレミヤにとつて民族的危機の実体は何であったか。それはエレミヤにはヤハウエとイスラエルとの呼応的人格關係の破局であった。

ヤハウエとイスラエルの呼応的人格關係の破局が如何にしてエレミヤに把握されたか。

これは先ずエレミヤの歴史的直觀性に歸せられなければならない。

エレミヤは祭司の子であった。人はこの事から彼の文筆の才能をその遺伝性に歸する。しかしこれと同時に人は彼の歴史的直觀性も亦彼の家系と環境に由来させる事を忘れてはならない。祭司のイスラエルに於け

る社会的使命は我が大和王朝に於ける語部のそれに似ていた。

彼等は忠実な伝承の祖述者であり丹念な史実の記述者であった。彼等の歴史は云わば過去の歴史であった。

エレミヤは併し犀利な伝承の批判者であり、峻厳な史実の論告者であった。

祭司には歴史はヤハウエの恩恵の連続であった。エレミヤにはそれはヤハウエの審判の非連続であった。

エレミヤは一切をヤハウエとイスラエルの呼応的人格関係に溯源した。彼はヤハウエの前に^{註三}モーセもサムエルも排除した。

ヤハウエとイスラエルの契約の中核をなしたものは祭司によれば犠牲であった。

イスラエルの家よあなたがたは四十年の間、荒野でわたしに犠牲と供え物をささげたか
アモス書、五、二五

これはアモスによつて伝承に対し投げられた疑問である。

それはあなたがたの先祖をエジプトの地から導き出した日に、わたしは燔祭と犠牲とについて彼らに語ったこともなくまた命じたこともないからである。七、二二

これはエレミヤの犠牲に対する絶対否定である。

エレミヤにはヤハウエとイスラエルの呼応的人格関係は破局であった。エジプトから砂漠、砂漠からカナン^{註三}の沃地、これがヘブル民族の移住のコースであった。砂漠の神ヤハウエがカナンの沃地に入った時、イスラエル宗教——より厳密に云えばモーセ宗教——は著しく変質した。

モーセ宗教に於けるヤハウエの倫理性はカナンの神バールの自然性を

エレミヤに於ける預言者の性格

混入され、その救済性はカナンの文化性に圧倒された。

人がこれをバールヤハウエ崇拜と呼ぶのは最も適切な表現であろう。

ソロモン王の死後の南北分裂はイスラエルに民族的危機を直覚した。そうしてバールヤハウエ崇拜に危機の根源を見出したのは預言者エリヤであった。

あなたがたはいつまで二つのもの間に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい。しかしバールが神ならばそれに従いなさい。列王紀上、一八、二一

エリヤの時は併しヤハウエとイスラエルの関係が危機であってもその破局ではなかった。エレミヤに於ては神と選民の関係は破局であった。

エレミヤはヤハウエの言葉を同胞に語った。併し同胞はヤハウエに帰らなかつた。

彼はイスラエルの救に絶望した。

エチオピアびとは

その皮膚を変えることができようか。

ひようはその斑点を変えることができようか。

もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも善を行うことができる。一三、二三

イスラエルには悔改が不可能であった。

エレミヤの預言は北方スキタイの侵入に始つた。併しこれは実現しなかつた。

エレミヤは正しく預言者のスタートに於て失敗した。併しヤハウエがエレミヤに対し語る神であると共に問われる神となつ

たのはこの預言者の失敗のスタートを契機としたのであった。

ヤハウエはエレミヤに取っては信頼の対象であった。併しヤハウエが怨嗟註四され疑惑されそうして哀訴されたのもエレミヤに於てであった。これはヤハウエとエレミヤとの人格関係の緊張であった。ヤハウエとエレミヤとは語り問われる対話関係を連続した。

これら二つの間の対話は正と反との反撥であった。それは正テセテと反テセテとを包み越えた合ジテの止揚を見たてであろうか。

主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが彼らはそのわたしの契約を破ったと主は言われる。しかしこれらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしの律法を彼らのうちに置きその心にしるす。わたしは彼らの神となり彼らはわたくしの民となると主は言われる。三一、三二—三三

人がヤハウエとエレミヤの対話と出会に於ける正と反とを包越した止揚の世界を上掲の章句に求めるならば、彼は少しも誤らないであろう。ヤハウエは神でありエレミヤは人である。

ヤハウエとエレミヤとの自己同一はその方向が見出されてもその終着点に到着はされなかつたであろう。ある学者註五は右の章句を後人の挿入とす

それは恐らくユダヤ教の成立後であろう。エレミヤはヤハウエに対して無媒介直接性であった。併し人はこの事によってエレミヤに近代的個

人を承認してはならない。

彼はヤハウエに選ばれた。彼はヤハウエとの人格関係に疎外される事ができなかった。

彼にはこれと同時にイスラエルの民族の外に立つ個人エレミヤなるものがなかった。

彼には近代的の人格の二重性が見出されなかった。彼の別名はイスラエルであつたらう。

彼は時代苦を傍観する近代的文化人ではなかった。彼は時代苦を負担する天才であつた。

パウロはローマ人への手紙に於て彼のキリストにある信仰の凱歌をあげた、併しこの凱歌も東の間、彼は同胞イスラエルに対し断腸の泣訴をして

わたしはキリストにあつて真実を語る。偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によつてわたしにこうあかしをしている。すなわちわたしに大きな悲がありわたしの心に絶えざる痛がある。実際わたしの兄弟肉による同胞のためなら、わたしのこの身がのろわれてキリストから離されてもいとわれない。九、一—三

と歌っている。

パウロにはイスラエルの救なくして個人パウロの救がなかった。これはそのままエレミヤの場合ではなかつたらうか。

南王国ユダはバビロン王ネブカドネザルに滅された。(前五八七)

エレミヤはこれを預言しそうしてバビロンに無条件降服を勧告した。

ヤハウエはイスラエルの神、イスラエルはその民であつた。

イスラエルの滅亡はヤハウエの審判であつた。エレミヤはヤハウエの義に服した。

ヤハウエはイスラエルの神である。

ここに人はヤハウエにイスラエルの救を期待した。かかるイスラエルのヤハウエの要請は背理であろうか。

エレミヤに於てはこれは背理ではなかつた。彼はヤハウエの代弁者でありまた同胞の執成者でもあつた。

彼のヤハウエへの忠誠と同胞への真実とは両立したてであろうか。

人は悲哀の預言者エレミヤと云う。

彼の悲哀とは何を指すのであろうか。

これはヤハウエへの忠誠と同胞への真実のこれがかれらに於て (entweder oder) に置かれこれもそれも (Sowohl als) の立場を見出し得なかつた一事であろう。そうしてこれがかれらの立場に於て彼の選んだものはいずれへの道であつたらうか。

エレミヤの選んだものは民の側へでなかつたらうか。

ユダヤは滅ぼされてその民の秀逸はバビロンに移された。エレミヤは捕囚者と運命を願つた。彼の最後に就ては史実的には立証すべきものがない。しかしエジプト逃亡者の群に加えられそこに於て彼が惨殺されたと云う伝説は真実に近いであろう。

註一、山谷省吾訳オットー聖なるもの一五頁。

註二、ヘブル語 qadosch 神のために区別されたものの原意。

註三、エレミヤ書第十五章一節。

註四、同書 第二〇章。七一九。

註五、例えば Dahn, Cornill.

エレミヤに於ける預言者的性格

むすび

預言者の中には仮空または無名の理想像がある。例えばヨナ・グニエルの如きはそれである。併しエレミヤは現実の歴史像であつた。

ヤハウエの言葉は彼の口を通してイスラエルに伝えられた。より適切に云えばそれはエレミヤの人とその生涯を通して伝えられた。

彼は捕囚前の最後の預言者であつた。

バビロン捕囚は^{註一}イスラエルの歴史の破壊に近かつた。イスラエル精神は文字通り少い残の者によつて伝えられなければならなかつた。

ヤハウエはイスラエルを滅した。それはイスラエルの背信の故であつた。

併しヤハウエのイスラエルの選定はヤハウエの意志に基いていた。

この限りに於てはイスラエルの滅亡はヤハウエの背理とされなければならなかつた。

イスラエルの滅亡はヤハウエの懲罰である、併し懲罰の自己主張がそれ自体の故ではない。イスラエルの懲罰は万国の代償である。

かかるイスラエルの歴史的使命の自己解釈がなされたのは第二イザヤ五十三章のヤハウエの僕である。

このヤハウエの僕が^{註二}エレミヤの人と生涯を背景にする事なくしては描かれなかつたらうと推定するのは決して誤でないであろう。

註一、バビロン捕囚と共にイスラエルの古代からの文書が焼失した。

Cornill: The prophets of Israel 1904 16 p.

註二、江原万星著宗教と國家エレミヤ記の研究一九頁。